

・5分前着席を心がけましょう

司式 熊田雄二牧師

奏楽 森永美保姉妹

前 奏  
開 会 招 詞

\* 賛 美 歌 7:1 父の神よ夜は去りて

**父の神よ夜は去りて 新たなる朝となりぬ**

**我らは今 御前に出でて 御名をあがむ アーメン**

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 (詩編51編)

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。

わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 72:1 心を高くあげよ 主の御声に従い

**ただ主のみを見上げて 心を高くあげよ アーメン**

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 5 使 徒 信 条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

献 金 (黒)教会活動 (赤)東部地区学生修養会 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

《 子ども向けプログラム 3階小礼拝堂 57 》

聖 書 朗 読 民数記 6章24 - 26節 (旧約聖書221頁)

説 教・ 祈 禱 礼拝は生命<sup>®</sup>「祝 禱」 熊田雄二牧師

- \* 賛 美 歌 103 : 1 日々主は共にいまし  
**日々主は共にいまし 悩みに勝つ力**  
**全ての重荷を負い 慰め助けたもう**  
**愛に満てる御神は 恵みを日々与え**  
**悩み苦しむ時も 憩いと安きたもう アーメン**

\* 主 の 祈 り 祈 禱 書 1

天にましますわれらの父よ  
願わくは御名をあがめさせたまえ  
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ  
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を我らが許すごとく 我らの罪をも許したまえ  
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ  
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

- \* 頌 栄 67主イエスの恵みよ  
**主イエスの恵みよ 父の愛よ 御霊の力よ ああ御栄えよ アーメン**

- \* 祝 禱  
後 奏 (黙 禱)

報 告

古澤純一長老

I 礼拝指針第四十九条（祝福・祝祷）

牧師は、礼拝にあずかった者を、この世に再び派遣するにあたり、神の祝福を求め、ふさわしい聖書の言葉を選択し、あるいは適切な祈りをささげ、神の祝福を宣言し、礼拝を閉じる。

この項は、改正前の「礼拝指針」にはありませんでした。したがって、世界的な典礼（礼拝式）改革運動の影響によることが分かります。祝祷は祝福をもって信徒を日常生活に送り出す、という意味合いを強く意識したものです。今日、各教派のさまざまな式次第がありますが、中には、「派遣」と書かれているものもあります。

祝祷の聖書箇所は現在の『式文』に6箇所あげられていますが、その内の三つを私は用いています。というか、多くの牧師はこの三つを用いています。また、現在の『式文』では、箇所だけを挙げて本文は書いてないです。そこで、私は、文語訳を用いています。

ところが改訂式文のお試し版では、口語訳で本文を入れています。こういう親切は要らないと思います。たとえ口語文で書いてあっても、私は文語訳を使います。これは信仰の体質によるからです。要するに文語訳の方が気合が入るからです。次の牧師は分かりません。

- ① 仰ぎ願わくは、我らの主イエス・キリストの恵み・父なる神の愛・聖霊の親しき交わり、我ら一同と共に、永遠に豊かにあらんことを。

（Ⅱコリント13:13）

- ② 願わくは主なる神、汝らを恵み、汝らを守りたまわんことを。

願わくは主なる神、そのみ顔もて汝らを照らし、汝らを憐れみたまわんことを。

願わくは主なる神、そのみ顔挙げて汝らを省み、汝らに永遠の平安を賜わんことを。

（民数記6:24～26）

- ③ 願わくは、永遠の契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを、死人の中から引き上げたまいし平和の神、その喜びたもうところを、イエス・キリストによりて我らの内に行ない、御心を行わしめんために、すべての善き事につきて我らを全うしたまわんことを。世々限りなく 栄光神にあれ。（ヘブル13:20～21）

その祝祷の前に、「ふさわしい聖書の言葉」を付けることもあります。これは口語訳にしています。

- ① 願わくは、希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって、希望に満ち溢れさせてくださるように。

（ローマ 15:13）

- ② 願わくは、忍耐と励ましの神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる

神をたたえさせてくださるように。

(ローマ

15:5.6)

- ③ どうか、平和の主御自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和をお与えくださるように。主があなたがた一同と共におられるように。

(Ⅱテサロニケ3:16)

- ④ 私たちの主イエス・キリスト御自身、ならびに、私たちを愛して、永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、私たちの父である神が、どうか、あなたがたの心を励まし、また強め、いつも善い働きをし、善い言葉を語る者としてくださるように。

(Ⅱテサロニケ2:16・17)

「頌栄」の三位一体の神への賛美から、「祝祷」の三位一体の神からの祝福と派遣、というつながり具合は分かりやすいと言えます。

## Ⅱ 祝祷—神の子らの派遣 なぜ派遣か

- 1 現代の礼拝研究から、祝祷を派遣というくくりの中で式次第を作る教会があります。派遣を強調するにはわけがあります。通常感覚では、日曜日は教会に行き礼拝に出て家に帰るものです。派遣というとは逆になります。神の子らにとっては、教会が帰って来る神の家です。日曜日毎に、神の家に帰ってきて、家庭・職場・学校に派遣されるのです。
- 2 通常祝祷は、第二コリントの最後が、最もまとまりが良いので、いちばん多く使われます。三位一体の神に包まれる祝福があり、これにオルガンの後奏が続いて、信徒は会堂に満ちるオルガンの響きと音色で三位一体の神に包まれるのです。三位一体は頭で理解するより包まれる体感が大事です。三位一体の神の愛のまじわりの中に入れられること、これこそ永遠の命の祝福であり、神の国の中心なのです。
- 3 民数記のアロンの祝福は、まさに祝福に満ちています。神の民が約束の地に向かう旅路の祝福は、一人一人の人生の旅路の祝福に重なります。同時に、祝福して旅路に送り出す派遣という意味合いもあります。礼拝は、再び一週間の働きに派遣する祝祷で閉じるのです。

祝祷に終わり、また次の週の「招きの言葉」で集められます。礼拝で始まり礼拝で終わる一週間のライフサイクルは、神の国での永遠の安息を目指すものです。だから、説教者も信徒も、一週間の生き方が大事です。御心を学んで御国を来たらせるような生き方が大事です。生活の場、働きの場、学びの場で、神の国を来たらせる働きに貢献するのです。

神の国を作る働きには小さな事ことも大きな事もありますが、基本は御心を知って祈って行なうことです。主の日の礼拝を中心に、日々、御言葉と祈りを基本にする生活習慣を身に着けましょう。週報にある一週間の御言葉と祈りを大事にしましょう。必ず祝福をいただくことができます。

Ⅲ 第二コリントの最後の祝祷「主イエス・キリストの恵み・父なる神の愛・聖霊の親しきまじわり」も、派遣の意味を持つ。

1 これは一週間の働きに派遣する意味もあるのですが、伝道の働きに派遣する意味も強く覚えさせられます。

「主イエス・キリストの恵み・父なる神の愛・聖霊の親しきまじわり」。この三位一体の神の愛のまじわりの中に入れられることが伝道です。今、礼拝している信徒・求道者・契約の子らに加えて、さらに家族親族友人知人、地域の人々が入られることが伝道です。これは、学校や職場に伝道しに行くことではありません。学校や職場には、勉強しに行く、仕事をしに行くのです。

礼拝で癒しと活力を与えられたら、伝道せずにおれないのです。礼拝の祝福に包まれると、その恵みがあまりにも素晴らしいので、隣人もその恵みを受けるよう願わずにおれません。

礼拝に出る前、一週間に疲れた私たちは魂の病人状態です。しかし、主イエスは「医者が要るのは病人である」と招いてくださいます。そして、礼拝に出た後、癒しと活力をいただいて帰りますから、他の人の魂にも、魂の医者に引き合わせてあげたくなります。「疲れた者、重荷を負う者は誰でも」と招いてくださるキリストに会わせてあげたくなります。特に疲れた人には。これが伝道です。祝祷による派遣は、伝道せずにおれない魂にもなるのです。

2 詩編23編が親しまれるわけを味わって説教を閉じましょう。詩編23編は、招きに始まって祝祷に終わる神の祝福に満ちています。主はわが牧者であって、礼拝に招き、御言葉を食べさせ、とこしえに神の家を私の住まいとさせていただきます。

きょうは祝祷がテーマですから、特に最後の「主の家に私は帰り、生涯、そこにとどまる」ことに重点を置いて味わってみましょう。「帰る」(新共同訳)は「住む」(口語訳)とも訳せるヘブライ語です。神の家族である神の子たちにとっては、神の家が帰って来る家であり、永遠に住む家です。

祝祷は、神の家の中心が、三位一体の神の愛の交わりであることを覚えさせてくれます。その中に入れられることが永遠の命の祝福であることを覚えさせてくれます。その中心から、神の子らは、この世に派遣され、この世に御国を来たらせる働きに用いられ、また神の家に帰ってきて、礼拝で癒しと活力を受けます。

そして、また派遣されます。この繰り返しの延長上に、救いの完成と御国の完成があります。疫病、猛暑、水害、社会経済の不安、世界戦争の危機、何があっても、あきらめずに前に向かって生きる希望を持ちましょう。

#### IV 詩篇23編 交読